# 水道の歴史

昔の人々は、河川や湖から水を運んだり井戸を掘ったりして生活用水を確保してきました。

しかし都市が発達し人口が増えると水が足りなくなってきました。

そこで遠くの水源から町まで水路を引き清潔な水を確保しました。これが、水道の始まりと言われています。

本格的な水道ができたのは、紀元前４世紀頃の古代ローマで、何十キロも離れた場所からアッピア水道橋やヴィルゴ水道などを使ってローマ市内に給水していました。ちなみに、ヴィルゴ水道の終点は有名なトレヴィの泉です。

## 日本では

1600年頃に徳川家康が江戸に引いた神田上水が最初といわれています。この頃の水道は、直接河川の上流から木や石でできた樋（とい）を通して町の中に給水していました。

明治に入ると、外国との交流が盛んになり、文化や産業の発達により水道の汚れが目立つようになりました。飲み水が原因によるコレラ等の伝染病は多くの人を苦しめました。そのため、今までのようにただ河川からの水を引いた水道ではなく、ろ過や消毒等の処理をした水を鉄管で給水する安全で衛生的な水道ができました。

これが、日本における近代水道の始まりで1887年（明治20年）に横浜に設置されました。

## 那覇市では

昔から水源に乏しく、飲み水は雨水や井戸水に頼ってきましたが、当時の宜野湾村（現宜野湾市）に水源が発見されたことをきっかけに、1933年（昭和８年）にはじめて水道による給水が始まりました。

第二次世界大戦で水道施設のほとんどが壊されてしまいましたが、1954年（昭和29年）米軍からの泊浄水場の返還をうけ、本格的な給水が再開されました。その後、人口の増加や水源不足のため頻繁に断水があり、早急な水源開発が課題となりました。

今日では、北部のダムの整備や海水淡水化施設（県企業局）の完成などで、平成6年から14年間断水は行われていません。

泊配水池（平成14年完成）
泊浄水場跡地に建設